

令和 3 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立境高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	価値観が多様化する時代を生き抜く力と豊かな人間性を育成する。 ・多様な生徒に応じた教育課程・クラス編成等により、学力の向上と進路目標を実現する。 ・切磋琢磨し、自己の多様な能力・適性を発見して才能の開花を図る。 ・地域に信頼され、地域の期待に応え、地域を支える学校づくりをすすめる。	今年度の 重点目標	「BIG」に育て境高生 1 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚 2 命の教育（人間教育）を充実 3 主体的に学ぶ姿勢を確立して進路目標を実現 4 学校業務改善の取組を進め、学習指導をはじめとする生徒に対する指導の充実を図る。
-------------------	--	--------------	---

年 度 当 初					評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 部活動の振興 を基軸とした チーム境高意識 の高揚	○「部活動に入ってしっかり頑張った」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○全国大会出場者が80名、入賞者が5名を超えること。 ○中国大会出場者が200名を超えること。	○12月生徒アンケート結果「部活動に入ってしっかり頑張った」で「あてはまる」と回答する生徒が72.6%（「だいたいあてはまる」を合わせると88.0%） ○全国大会出場者24名（うち入賞者0名）。中国大会出場者数59名（近畿大会含む）。 ○新型コロナウイルス感染症の影響により、大会や練習が制限される中、生徒は積極的に取り組んだ。	○文武両道の活力があり地域の誇りとなる普通科高校として存在 ○県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校内外に活力ある境高を発信	○審査期間やコロナによる自粛期間こそ、文武両道を実践する時だと考え、部活動の学校目標と進路目標の達成のため高い意識で取り組める体制づくりが必要。 ○引き続き部活動と勉強の両立を図る。部活動においても、顧問から積極的に指導をすることが重要である。 ○小・中学校との連携の強化。			
	○ボランティア活動や地域の活動に参加する生徒の数が増加すること。	○新型コロナウイルス感染症の影響により、ボランティア参加者は42名(昨年度125名)で減少したが、地域ボランティア活動への生徒の参加意欲は依然高い。 ※3年次生においては延べ19名が保育園・介護施設でボランティア体験を行った。 ○新型コロナウイルス感染症流行に伴い、スクールプロジェクトは中止とした。	○地域のボランティア活動への積極的な参加 ○部活動において地域の人材の力を借りたり、生徒が小中学生に学習やスポーツを指導したりすることで地域の信頼を獲得				
2 命の教育（人間教育）を充実	○「自分や他人を大切にすることができた」と回答する生徒の割合が9割を超えること。 ○「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」と回答する教員の割合が9割を超えること。	○生徒アンケート「自分や他人を大切にできる」は98.7%であった。命の教育講演会などの講演会は開催できなかったが、LHR・学年集会や学校生活をととして命を大切にする教育を推進した成果が表れた。教員アンケートでも「生徒は自分や他人を大切にできるようになった」は97.6%であった。 ○生徒アンケート「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」は98.3%。 ○ゴミ減量化は平成28年度比で2.0%減（4～12月期比較）であり、取組の成果が表れた。教育環境として朝清掃の徹底、生徒会や環境委員等が積極的に周辺清掃やゴミ減量化に取り組めた。 ○学期1回ごとの生徒情報交換会を実施し、教員間の情報共有を深めた。 ○Q Uを用いて生徒の抱える問題の早期発見に努め、学年・クラスの実態を把握した。 ○挨拶の声が小さかったり、挨拶ができない生徒が増えた。	○生徒一人ひとりの状況を全教職員が把握できているという人権尊重意識の高い職場 ○命の教育全体計画に基づいた規範意識・人権意識の高揚	○挨拶については、部活動を通して指導したり、生徒会執行部が手本となるよう指導する。 ○継続して生徒との対話を心がける。保健部や生徒部と情報共有し、アンテナを高くして生徒の状況把握に努めるとともに、組織的に対応する。			
	○「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○ゴミの分別・減量化について、平成25年度との比較で継続して減量を実現すること。		○挨拶の励行、服装・清掃指導等の徹底 ○生徒が主体となって取り組む学校環境の整備				
3 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現	○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒の割合が5割を超えること。 ○大学入学共通テストの出願率が7割を上回ること。 ○国公立大学現役進学者数が30名を超えること。	○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒が80.8%であった。 ○大学入学共通テストの出願率が7割を上回り74.6%であった。 ○国公立大学現役決定者数が24名。 ○「探究学習等に主体的に取り組むことができた」と回答する生徒は85.2%であった。 ○境考学は新型コロナウイルス感染症の影響により、フィールドワークなどの対外的な活動が計画通りにできなかったが、昨年よりも工夫しながら取り組んだ。 ○土曜日学習会、講習は計画的に実施でき、成績上位者の生徒に対する指導が行えた。 ○少人数指導は一人ひとりの発言や発表の機会が増えメリットがあった。特進クラスを習熟度別クラスにした際に、下位クラスの授業実践に課題が残った。	○生徒が3年間をととして進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿の確立 ○キャリア教育全体計画に基づいた明確な進路目標を設定 ○「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養うため、境考学を充実・発展	○今後、一人1台のタブレットが整備されることに伴い、早急に利用方法の検討が必要である。 ○G suiteの活用方法の講習を行ったが、今後も利用を呼び掛けるなど定着するまで継続的にアクションを起こしていく仕組みが必要である。 ○生徒自ら学ぶためには進路目標を生徒それぞれが明確にする必要があり、そのための助言を教員がしていかなければならない。教員はそのための研修（学習）と、生徒に向き合う十分な時間が必要。 ○自分でテーマを決めて、調査、発表を行う授業形態の導入。 ○コロナ禍での境考学の在り方を再検討する必要がある。			
	○「授業の内容に興味がわき、理解が深まった」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業を8割以上の教員が実践すること。	○「授業に前向きに取り組み、理解を深めることができた」と回答する生徒は89.5%であり、当初の目標値を超えた。 ○「ICTを活用した生徒主体の授業」は26.2%の教員しか実践できておらず、昨年（20.0%）よりは若干増えたが今後の大きな課題である。 ○「アクティブラーニング型授業を取り入れ、授業内容に興味を持たせ、理解を深める授業実践ができた」と答えた教員は52.4%であった。 ○遠隔授業などICT化に向けた取組を始めることができたが、まだまだ課題も多い。	○アクティブラーニング型授業を取り込んだ授業研究会並びに授業参観週間での各教科代表による公開授業の定着				
4 学校業務改善の取組	○行事や委員会等を抜本的に見直す。 ○長時間勤務者の解消	○月当たり(12月期比較) 時間外業務では平成30年度比で50.0%削減となつて目標値を超えた。 ○時間外業務80時間超勤務者は0名、45時間以上80時間以下勤務者はのべ15名と大幅に減少した。 ○授業の空き時間や放課後を有効に活用して教材研究や考査作成を行い、時間外業務の削減に努力した。 ○行事や部活動、会議の見直しをして業務の負担を減らそうとはしているが、まだ不十分である。 ○一部の教科や教員に業務の偏りが見られた。	○時間外業務の上限が、月45時間、年360時間を超えないよう遵守 ○休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底	○今後も行事の精選や担任、分掌とが連携を図っていく。 ○3年生の面接指導・小論指導は8限講習等も考慮して割り振る。 ○リモート授業等、模索・改良した成果を今後に活かしていく。 ○週明けテストや8限自学講習の抜本的な見直しが必要。			

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し
【100%】 【80%程度】 【60%程度】 【40%程度】 【30%以下】